

風景のクオリアと言葉

佐々木 葉

正会員 博士（工学）早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
（〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp）

景観の計画やデザインにおいては、目標像の共有や関係者とのコミュニケーションのためにも言葉を用いることが必須である。一方風景を言葉によって認識するという事象の本質はどのようなものなのか。この疑問に対して、脳科学者である茂木健一郎のクオリアをキーコンセプトとした論考は一つの新鮮な解釈を提供してくれる。本稿では感覚を特徴づける質感であるクオリアと情報の知覚であるポイントによって説明される明示的な認識の構造を、風景に適用することを試みた。そして、こうした思考から得られる景観の計画やデザインへのスタンスを確認する。

キーワード: 風景, 景観計画, 意味, クオリア

1. 景観の計画のために

各地で景観計画の策定が進む。言うまでもなく景観法を受けての活動である。そこには、現実問題として起きている景観の破壊や混乱や無個性化を抑止し、秩序と調和と魅力を視覚的に確認できるような環境の創造のための並々なぬ工夫と努力がある。歴史性を継承する街並の維持。恣意的で突発的に現れる建物の高さや色彩のコントロール。商業主義の競争をひた走る看板の整除。和やかでゆとりあるコミュニティの揺籃となる環境の保護と醸成。いずれも現実問題として重要である。そのため、現実に見ることのできる、つまりデジカメに写すことのできる景観の問題を把握し、目指すべき目標像の設定とその実現のための方法が議論され、それを担保する行政手続きが整えられる。その成果が、少しずつ現実の景観を変化させていくことを期待する。しかし、その成果が確実となるためには、景観計画のみならず、都市計画や土地利用計画、さらには交通計画や社会福祉制度、税制までも含めた総合的な施策へと発展させていくことが必要であるように思う。

さて、こうした現実問題の深刻さからすこしはなれて、純粋に、ある地域の景観を計画する、ということを考えてみたい。景観が環境の眺めである以上、それは環境の計画となる。しかし、景観は単なる環境の視覚像ではなくそれを眺める人間の価値観と不可分な現象であるため、その計画では、人間の価値観や環境への志向にも踏み込まなければならない。この両面から景観計画を構想することを、土木学会景観・デザイン委員会のデザインワークショップのワーキングメンバーと議論してきた。そし

て2007年1月には、「現代の風景のコンテクスト—新しい景観計画の手がかりを求めて」というテーマでシンポジウムを開催した¹⁾。そこでは十分に整理された結論にいたったわけではないが、同一視野に入らない要素同士を関係付ける、シーンの構図からはその特徴が見つけづらい要素を重視する、出来事や行為によって記憶される場の関係性を反映させる、といったことが景観計画の中でも構想されてよいのではないかと問題提起を行った。

こうした問題提起のさらなる背景としては、ポストモダン社会における景観論およびその計画とは、という筆者の一貫した問題意識がある²⁾。これらの思考の中で常に鍵となるのは、ある視点から得られる視対象の見えの形としての景観に収まらない風景^{補注1)}の扱いである。言い換えれば、画像としてデジカメで写すことのできない景観、極端にデフォルメされた見えや場合によっては目に見えないイメージとしての像を含めた風景の扱いである。

これに対する一つのアプローチとしては、ランドスケープ・エコロジーを参照することが考えられる。その視点に依存しない景観の概念は、目先の美醜にまどわされない地域の環境の関係性の観点から、ある景観計画への手がかりを与えてくれるであろう。特に「間にある都市」³⁾と領域的に重なることも多いミドルランドスケープへのこの分野からのアプローチには、地域のサステイナビリティという目的に何らかの手がかりを与えてくれるような期待がある⁴⁾。一方、風景のイメージを扱うということであれば、言語による風景の編集という、風景論としてはおなじみのアプローチも当然中心的課題

となってくる。先のランドスケープ・エコロジーの参照においても、その機能性の証明以上に、それを規範として社会的に共有し、了解する過程におけるイメージや意味が重要となる。したがって、著者の問題意識においては、言葉による風景の理解と編集そして計画が、まずは中心的課題となるのである。

もちろん冒頭に述べたような現実問題への対応としての景観計画においても、言語は重要である。地域の景観イメージや目標像をキャッチフレーズ的な言葉によって表現し、具体的な環境操作の方法も図面や数字のみならず言葉によって規定される。行政手続きというプロトコルを記述するための言葉を差し引いた、景観計画のイメージや方向性を示す言葉の選択はやはり重要である。一方、言葉によって捉えられる風景には形骸化と陳腐化というリスクが常に伴う。またコンテキストに依存する言葉は、コンテキストの共有を前提としているが、現代においてはそれが危うくなっているのも事実であろう。

こうした点を考慮しながら、景観を計画するという行為の大前提となる、風景の共有とコミュニケーションという現象とは何か、またそこにおける言葉の役割をどう考えたらよいか。そんなことを思い巡らしているときに、たまたま茂木健一郎の「脳と妄想」⁵⁾を読んだ。するとそこには現実のデジカメに写る景観にとどまらない風景論へびたりと寄り添う感覚が満ちていたのである。ついで、彼による心と脳の問題に対する論である「クオリア入門—心が脳を感じる時」⁶⁾において、より論理的に、風景の認識の構造が整理され、そこにおける言葉の役割にも明快な位置が与えられたと感じた。そこで本稿では、茂木による心と脳の論考にインスパイヤされた、現時点での著者が考える風景のクオリアと言葉について記してみたい。

2. 風景のサピア・ウォーフ仮説の変質

先にあげた茂木の2つの著作には随所で新鮮かつ共鳴する記述に出会う。また「クオリア入門」では一つ一つ扉を開けていくようなわくわくする興奮を感じた。内容はもちろんのことながら、きわめて斬新で高度な論理を平易な言葉で無駄なく論じるその手腕にも脱帽である。その具体例を逐一ここで記すことはできないが、本小論の重要なきっかけとなった箇所について、少し長くなるが以下に引用しよう。

「カナダやアラスカのイヌイットは、白い色に対応する言葉を多く持っているという。イヌイットたちは、一年中雪に囲まれて暮らしているため、雪の色の様々な変化に対応する言葉を発達させたい。温帯に暮らす日

本人が単純に「白」と片付けてしまう色の中にも、様々な言葉の区別がある。

しかし、このような、言葉のラベル付けの体系の違いは、必ずしも、イヌイットと日本人の間で、心の中で見る白い色のクオリアのレポートリーが異なることを意味してはいない。

実際には、日本人が「白」というラベルを貼っている色には、微妙な色彩の変化がある。ただ、私たちは、そのような変化する色のそれぞれに、別の言葉のラベルを用意していないだけのことである。つまり、日本人は、イヌイットと同じように、「白」の内部で微妙に異なるクオリアを区別することができるのだが、それらのクオリアに、異なる言葉のラベルを付けないだけのことなのである。」(p.40)⁷⁾

茂木は、風景はもちろんのこと、言語学におけるサピア・ウォーフ仮説についてなんら言及していない。しかし、これは、これまで著者が理解し、また何度も学生に講義してきた風景のサピア・ウォーフ仮説に衝撃的な変質を一瞬にして与えた。念のためこれまでそのまま受け止めてきたこの仮説を見ておこう。

「言語学者によると、ことばの使用者は、「それを通じて世界を見るように定められているのであり、したがってわれわれの世界像はわれわれの話す言葉によって規定される。はじめから規定されている」(ムーナン)という。いわゆるサピア・ウォーフ仮説である。(中略)ことばはもちろんのこと、絵画、造園などのさまざまな非言語的集団表象にまで一般化された風景のサピア・ウォーフ仮説を支持したい誘惑に駆られてくる。」⁸⁾

「つまりわかりやすく言えば、雨の言葉をたくさん持つ日本人には微妙な雨の降り方を見分けられても、そうした言葉を持たない人には見分けられない」と、学生には説明してきたのである。確かに風景を記述する言葉の獲得の前後で眼前の眺めがありありと違って見えることはあると思う一方、風景を言葉によって記述してしまった瞬間に生じる、指の間から砂がこぼれ落ちていくような感覚、さらには同じ言葉を使っているながら、「なんか違うんだよなあ」という感覚も頻繁に持っていた。しかしながら、言分けの風景⁹⁾つまり言葉によって認識される風景は、文化的であり重要である一方で形骸化し陳腐化するという側面もあるので、計画という具体的な共同作業における扱いが極めて難しい、という時点でこのことについては思考停止していたのである。

しかし茂木のこの指摘は、風景を言葉によって理解するというこの意味を、さらに言えば、風景そのものを

私が見るということの構造を、いとも簡単に変質させた。つまり、風景を感じていることと、私がこの風景を見て（言葉を伴って）了解していることとは同じではない。茂木の論になぞらえて言えば、前者は風景のクオリアを感じている（または風景に対して視覚的アウェアネスの状態にある）こと、後者は私という主観が風景に対してポイントを重ね合わせて能動的に認識していること、となる。この違いをはっきりと認識することで、風景の言葉に対するスタンスが変化し、言葉による風景の編集への道を一步前進できるような気がしたのである。

3. クオリアとポイント

後先になったが、ここで茂木の論考の概要とキーコンセプトとなる用語の概説をする。

位置づけとしては、物質である脳にいかにして心が宿るのかという心脳問題に対して、クオリアという概念を出発点としながら、脳科学における各種の実験によって明らかにされている事象から哲学によって構築されてきた概念までを動員して構築しつつある論考である。彼が最もこだわるクオリア(qualia)とは、「赤い色の質感」、「バイオリンの音の質感」、「薔薇の香りの質感」など、感覚を特徴付ける様々なユニークで鮮明な質感を指す。そして様々なクオリアが満ちあふれているのが心である。心は脳の中のニューロンの活動によって生じる現象であるが、あるニューロンの活動があるクオリアに対応している、また、外界のある刺激が脳のあるニューロンの活動に対応しているという、事象と事象の対応関係では心は説明できない。脳の第一次視覚野から高次視覚野に向かうニューロンの発火のクラスターと、クオリアを伴う心の中の表象との関係を記述するなんらかのルールによって説明する必要がある。この二つは重生起とよべるような、ある因果性を有してぴったりと寄り添っているという関係で捉え得るとされる(2章)。

さらに心は、一つのクオリアで満たされているわけではない。赤い薔薇が緑の背景の中にある場合は、単純にいても緑のクオリアの中に赤のクオリアが分布しているということになる。こうした様々なクオリアが視野の中に並んで見えている状態が「視覚的アウェアネス」である。より高次の形態認識やそれに基づく言語処理や意味づけはなされていないが、なんとなく見えている、なんとなく薔薇に見える、という状態である。これにさらに脳のなかの形態を認識する部分において、薔薇であるという抽象的なしかし明快な表現が得られたときに、「これは薔薇である」と認識される(3章)。

途中をかなり割愛するが、この後者の抽象的な表現、

つまり「ここにこういう形(視覚的特徴)がある」ということを指示する知覚をポイントと呼ぶ。ポイントはクオリアとは異なる存在で、ポイントによる知覚にはクオリアは伴わない。クオリアが主役である視覚的アウェアネスと、高次視覚野における明示的な情報表現であるポイントが重なることで、「ああここに薔薇がある」というような意識的な視覚認識になる(5章)。こうした意識的な視覚認識の構造は、無数ともいえる心のクオリアの塊のある一部を、私という主観が拾いこいくというように能動的なプロセスをポイントが担っていると解釈できる。これはギブソンのアフォーダンスの概念に通じるものだ(7章)。

このポイントという概念は、現象学などで用いられる志向性と呼びかえられる。「あるものへ向かう」という、物質にはなく心に特有な属性である。この志向性の構造は言語と深く結びついている。また志向性がクオリア自体に影響を及ぼす、つまりあるクオリアを生み出すニューロンの発火のクラスターにどのように向かうかによってそのクラスター自体を変化させる可能性もあると考えられる(8章)。

以上、はなはだ不十分な説明ではあるが、茂木による心脳問題の論考が、私たちが環境を眺め、そこに満ち満ちている様々な印象をなんとなく感じ取り、そこから「ああ大文字山だ」、「おお、この道は山アテなんだ」、「さすが白砂青松だ」などと風景としての特質をはっきりと認識することを、脳内現象として明快に説明している、と著者は理解したのである。

4. 風景のクオリアと言葉

ここからは、茂木の論考にインスパイアされた著者の論考である。よって、大きな誤解が含まれているかもしれない。また、著者は風景を認識するというのを脳の科学的な反応やシステムとして記述することはまったく意図していない。できるはずもない。風景を眺める、風景を認識する、風景に心動かされる、という四六時中自分のなかでおきていることを、脳の働きのイメージとして断片的にでも表現しながら、ある地域の景観を計画するという行為への示唆を得よう、というものである。

風景はクオリア

私たちが環境の眺めにこれほどに執心するのは、そこに満ち溢れるクオリアのためであると言える。季節ごとの空の表情、紫に煙る山並みの奥行き感、石畳の街路の硬質感、せせらぎをてらす月光の滑らかさ、場末の路地に漂うどんよりとした雰囲気。あげていけばきりが無い。

これらはいまここに記すために意図的に言葉を探り出したが、実際には、「視覚的アウェアネス」の状態で感じられている。道を間違えないための目印としての認識や災害被害をさけるための場所の読み取りといった実利的な目的のためにも、環境の眺めは重要となる。これも一つの景観ではあるが、あまりそうした現実的な環境とのやり取りにかかわらず、眺めのなかに、「ああ、」といった感覚を覚えることが、風景の成立の根底にある。環境の知覚がクオリアの表象となるとき、風景が生まれる。風景は発見されるもの、と従来から言われているが、その発見とは、明示的で自覚的で言語によって表現可能な認識に限定する必要はない。その前段階としてクオリアの状態であっても、風景は存在する。つまり風景はクオリアである。

「クオリアは、社会的、文化的な文脈に組み込まれる前、言葉のラベルが付加される前の、原始的な感覚を指すのであって、これらの「後から付加されるもの」によってその属性が決定されるのではないのである。」(p.45)

ポイントとしての言葉

もしも人が自分自身という存在を認識する必要がない動物であったならば、あるいは社会を構成しない生き物であったならば、クオリアをポイントによって明確な認識にする必要はないといえる。つまりあるとき「ああ、」と感じたクオリアをなんとなくそのままの状態に放置しているだけでよいのなら、ポイントは要らないのだ^{補註2)}。きっと窓辺で虚空を眺め続ける猫のように。しかし人は、どういうわけか、クオリアを感じている自分を考える。そしてポイントによって、そのクオリアと自分との関係を切り結ぼうとする。そこに「ああ、これは〇〇だ」という明示的な認識が成立する。さらにその〇〇に言葉を付与することで、自分自身の過去の経験、記憶を通していま現在を認識することが、より可能になる。つまり、言葉があてはめられていなければクオリアが存在しないわけではないが、クオリアをはっきりと認識させるポイントとして、風景を記述する言葉を人は持つ。したがって、2章に示した風景のサピア・ウォーフ仮説に対する私の学生への説明は、不正確であったといえる。

「あるクオリアに対して私たちが付加する言語のラベルは、そのクオリアに対して貼り付けられる志向性^{補註3)}として成立している。私たちの心の中に感じられるクオリアの中には、いまだ、言葉のラベルが付けられていないものも多い。そのようなクオリアに対しては、志向性のダイナミックス、文脈の中で、そのクオリアに対して特別に用意された志向性のラベルが存在しないのだと考えられる。」(p.272)

以上より、アンケートなど何らかの調査によって明示的に指摘されることがない環境の眺めには、指摘されないという理由だけでクオリアが存在しない、つまり風景としての価値がないということにはならない。このことは、景観計画の策定によらず、景観評価一般において改めて留意すべき点といえよう。また景観をデザインする立場からいえば、いかなる環境も明示的なクオリアとして人々に認識される可能性がある、という思いをもって環境の操作に臨む必要がある。

風景の共有のための言葉

風景の言葉^{補註4)}は、ポイントとして自分自身の経験と現在の感覚とを結びつける。と同時に自分以外の他者とクオリア体験の共有を可能にする。これによって風景の共有と風景に関するコミュニケーションが可能となる。例えば木陰という言葉には、様々なクオリアが伴う。しかし私の木陰のクオリアとあなたの木陰のクオリアが一致しているかどうかはわからない。たぶん種々の違いがあるだろう。しかしそれでも重なり合う部分があり、さらにコンテキストの確認によってその木陰のクオリアを鮮明にしていけば、例えばそれをキーコンセプトにした広場のデザインを前に進めていくことができる。風景を共有し、それにむかって能動的に働きかける(つまり計画やデザインをする)際のコミュニケーションに必要な風景の言葉は、風景のクオリアを伴った言葉である必要がある。

しかしポイントとしての言葉には、特定のクオリアを伴わない言葉もある。あるいは人によってあたりなかつたりすることもある。白砂青松という言葉に、白と緑の生き生きしたコントラストや、松の枝振りシルエットの揺らいた感じ、松間から覗ける海の光や潮風のおい、といった種々のクオリアが伴う人と、浜辺に松林がある、という環境の理解にとどまっている人とは、この言葉による景観計画やデザインとしてのコミュニケーションは成立しない。うまく言葉にできないもろもろのクオリアに満ちた視覚的アウェアネスの状態を直接的に共有しようとするには、大変なわずらわしさが伴う。そのため、それらを明示的に示すポイントとしての言葉を介してコミュニケーションをとっているのだ、ということを常に思い起こす必要がある。言葉の段階で思考停止してはならない。

言葉からクオリアを探しに行く

クオリアとポイントの関係において、先に視覚的アウェアネスの状態があつてそれをポイントによって明示的に認識する、という一方向のプロセスとして理解してしまうことは、必ずしも適切ではない。先にポイントとし

ての言葉を学習し、それがぴたりと寄り添うクオリアを探す、というプロセスもあると考えられる。その言葉がどのようなクオリアに寄り添うのかを、一生懸命に感じようとしてみる、ということである。ある種のイメージトレーニングといえるかもしれない。そしてもちろん、ある言葉の獲得が、風景のクオリアを生成することもある。

「志向性が赤のクオリアを生み出すニューロンの発火のクラスターに対してどのような形式で向かっているかが、「赤い色の質感」自体を変化させる可能性もある。」(p. 279)

一方、クオリアとしての風景に執心していると、日常生活はままならないのも事実だ。多くの人が信号機の赤の感じをじっくりと味わっていたりすれば、交通は混乱する。なにより世の多くの人々にとって風景のクオリアはさほど重要なことではない、というのが現実のようだ。そうした人々をも含めて地域の景観を計画するには、風景のクオリアだけから景観計画を構想するのは現実的ではない。ところでポインタはクオリアと離れて存在し、それゆえに環境の中での合理的な行動を支えることができる。例えば、道に迷わないための目印、危険が潜む場所の印、身体の休息に適した環境、食料資源が得やすい場所など、こういった生きていく上で必要な環境の情報を合理的に認識するために、多くのポインタがある。伝統的にはこうした生きていくために重要な環境の眺めに一定の視覚的表現があり、たぶんそこには共有可能なクオリアが寄り添っていたといえる。しかし環境の人工的改変が進むにつれて、それらが消失、散逸している現代では、意図的にそうした環境の情報を何らかの方法で表現しなければならない。その表現に、看板や携帯のGPS画面ではなく、風景のクオリアを寄り添わせていくことを考える。これも、ポインタからクオリアを探しにいく、というアプローチといえよう。

「「ポインタ」の表現は、私たちの「主観性」の構造のうち、行為を通して世界に働きかけるという能動的な部分と密接に関連しているのである。」(p. 192)

以上、改めて風景を巡る自分の心を覗くような論考を試みた。無論これによって現実問題としての景観計画の策定に有用な示唆が得られたとはいえない。しかし、著者にとっては、もやもやとしていた自己と風景の関係に、あるすっきりとした理解が得られたように感じた。「心の見取り図」を描くことを目的とした著書「クオリア入門」の最後に、茂木は以下のように記述している。

「右の見取り図は、おそらく心脳問題の解決というターゲットに向かって歩む旅人が見た風景の描写に過ぎない。」(p. 284)

著者は茂木の論考によって、風景と自己との関係を示す、これまで接してきた世界とは異なる視点から描かれた一枚の見取り図を与えられたように感じたのである。

補注 1) 本稿において景観と風景の用語の原則的使い方は、環境の視覚像を何らかの明示的な意志や目的のもとに分析・操作する対象としてとらえる場合には前者、個人的主観的認識としてとらえる場合には後者とした。

補注 2) 後にも触れるが、ポインタはクオリアを明示的に認識するために存在するものではない。クオリアを伴わずに運動をコントロールするための知覚としてのポインタも存在する。

補注 3) 茂木は、クオリアを明示的に認識するために必要な知覚を「ここにこのような情報がある」と指示するコンピュータサイエンスの用語であるポインタと呼んで論を展開するが、後にこれを哲学者ブレンターノが用いた志向性という言葉に置き換えている。

補注 4) 風景の言葉には、風景の特色を説明する言葉、風景の印象を表す言葉、風景にとって重要な概念を表す言葉、風景として重要なエレメントとなるものを指す言葉、風景の様式を指す言葉、風景デザインの方法を示す言葉、などがある。これらの言葉の種類によってクオリアとの関係性に相違があると考えられるが、試論である本稿ではそこには立ち入らない。

参考文献

- 1) 土木学会景観・デザイン委員会ホームページに当日のプログラムが掲載されている。
- 2) 佐々木葉、現代の景観の目的と処方、景観・デザイン研究論文集 No. 1, pp. 87-95, 2006
- 3) 佐々木葉、「間にある都市の景観デザインへ」景観・デザイン研究講演集 No. 2, pp. 185-191, 2006
- 4) たとえば、山下三平・中村直史、流域景観の地理情報と意識評価の統合、景観・デザイン研究論文集 No. 1, pp. 97-106, 2006
- 5) 茂木健一郎、脳と仮想、新潮文庫、2007 初版は 2004 年新潮社
- 6) 茂木健一郎、クオリア入門—心が脳を感じる時、ちくま学芸文庫 2006
- 7) 文献 6), p. 40, なお以降茂木の論の参照および引用はすべて文献 6) からのものである。
- 8) 中村良夫、風景学入門、中公新書 1982 p. 80
- 9) 中村良夫、風景を創る—環境美学への道、NHK ライフラリー 2004 p. 68